三条ロータリークラブ週報　No. 40　1989. 4. 12　No. 1605

ロータリーに活力を―
あなたの活力を

PUT LIFE INTO ROTARY-
YOUR LIFE

1988～89年度 国際ロータリーのテーマ

●国際ロータリー会長　ロイス・アビー　●第256地区ガバナー　樫内悌三郎
●会　長―杉野　奎司　●副会長―小林　英雄　●幹　事―長谷川有美
●ＳＡＡ―榎本　勝、近藤　雄介　●例会日―毎週水曜日　12：30～
●例会場―三条市旭町２－５－10　三条信用金庫本店内　TEL　34 － 3311
●事務局―三条市旭町２－５－10　TEL　35 － 3477　田中久美子
（FAXも同番号　午後３時以後はFAXに切り替ります）
●クラブ会報委員―伊藤　廣一、大谷　幸平、五十嵐昭一、松谷　昊吉、渋谷　正一、小林　正義

出席会員数　会員　72名中　57名

先々週出席率　94.44％（前年同期　100％）

今日のお花　バラ

ヴィジター　三条南より　田中久作君
三条北より　羽賀一夫君

先週のメークアップ　4／10　三条南へ　斎藤弘文君、大谷幸平君、加藤紋次郎君、野水文治君、渡辺喜彦君、五十嵐総一君、堀川政雄君
4／11　三条北へ　藤村義彦君、山本福七君、轡田秋夫君、五十嵐晋三君、渡辺惣吉君

会長挨拶　杉野会長

御挨拶を申し上げます。お客様には気楽にお寛ぎ下さい。

桜が早く咲きまして、日本列島は春爛漫でありますが、散り始めたところもある様です。

何時散るのか気になるのが永田町の桜ですが「忍」の一字で持っているといわれてます。

昨日のテレビで地球上究極のエネルギーといわれます核融合の研究が米英の学者による追跡試験に成功したと発表されて世界の注目を浴びております。

超電導と同じく今世紀最大の発見といわれ、地上の太陽と21世紀の中期に実用化の予想

がなされておったそうですが、実現の可能性は今世紀中にもあるという事でそうしますと人類がエネルギーの呪縛から解放されるということです。

我が国の基礎研究が欧米よりも遅れていると言われておりますが、また先を越された様です。以上で挨拶にさせて頂きます。

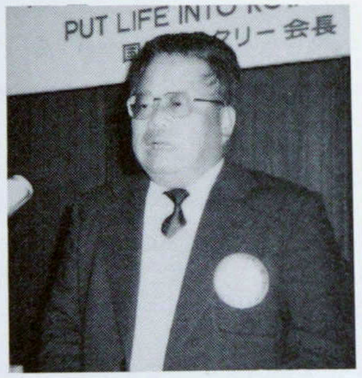
ニコニコボックス　¥ 4,000

杉　野　君　結婚記念日の花束ありがとうございました。

金　澤　君　3月17日の結婚記念にお花と、3月31日の誕生日のケーキ大変に有難うございました。
3月中は一回も出席せずメーキャップだけでした。次回よりがんばります。

卓　話　死に臨む医学

谷村憲一会員



先月は銅冶先生から長生きの医学についてお話がありましたが、今日は死に臨む医学について、日常の臨床の中で感じることを若干述べてみたいと思います。

一生の間に、患者の死に立ち合うこともなく、一例の死亡診断書も書くことなく過ごす幸な医者も居るかも知れません。

しかし、脳外科のような特殊な科では、頻繁に人生の永遠の離別の悲劇に立ち合うことになり、私共は毎年60例前後の死亡診断書を書いております。辛い仕事ではありますが、一方、多くを学び、人間的成長をさせてもらう幸運を感じるわけでもあります。

死の瞬間は様々な現われ方をします。

心筋梗塞、脳出血、また様々な事故等によって死の状態で発見された場合、医師は死の確認を求められるだけで、残された家族との間に多くのかゝわり合いを持たないこともあります。

事故や脳卒中、心肺の様々な病態が重篤で極く近い将来、確実に死が訪れる場合、医師は医療の科学と技術の両面に全力をあげて治療に専念することになります。

この状況は家族にとって晴天の霹靂のようなもので、現実を仲々受け入れ難いものです。当初本当にそうなのかと言う疑いから、本当だとしても何故私達がこんな目に合わなければならないのかと言う怒りが現われますが、急速に死の受容へと辿りついてもらわなければなりません。医師、看護婦、ケース・ワーカー、事務職員等医療従事者全員の誠実な献身のみが、ここまでやってもらったけれども駄目であったかと言う締めの受容に至る道であります。

注意しなければならないのは交通事故のような相手がある場合、怒りが相手に向けられ死の受容が仲々なされません。新たなトラブルを生じない為に言動に慎重さが必要です。加害者と言うような言葉は一度たりとも使ってはならないのです。

現実問題として、私共にはその正確なことは判らないことでありますし、将来立場が逆転することもあり得るわけで、新たなトラブルの原因を作ってはなりません。また人権保護の問題でもあります。

ちょっと余談になりますが、人権侵害については多くの場面があります。患者のプライバシーは厳守しなくてはなりませんし、4床部屋、6床部屋等で良く見かける患者の力関係から来る専占空間の偏りも単に整理整頓の問題ではなく、人権問題としてとらえる様指導が必要です。

近い将来に死が確実に訪れると考えられる場合。極めて高齢者で、本人も家族もその死を受容する準備がなされているような場合にはそれ程問題はありません。患者が働き盛りで、家族の大黒柱であり、子供達が自立していない場合や、患者が子供である場合には極めて深刻な問題があります。

今日は、特にこの状況での死を前にした医学あるいは医療について、死に臨む医学として最近経験した事例を挙げて少し話してみたいと思っています。

私共脳外科医が遭遇する例は主として悪性の原発生脳腫瘍が主でありますが、原発巣は手術が終わっているにもかかわらず、脳に多発した転移性脳腫瘍の例などもあります。

内科や外科やその他でも問題になっている癌の告知と同じことなのですが、この問題についてどの様に医師は処するべきであるかは一度も教育されたことはなく、賛否両論の中で主治医の選択にまかされています。卒後研修時代に教育を受けたことも、また重要な問題として充分な議論を尽したことも、少なくとも私は一度もありません。書かれたものや自分の経験から学び取って行くしかなかったわけです。

患者には充分なコミュニケーションの中で、むつかしい病気であることを少しづつ認知させる必要があると考えております。僅に残された人生を有意義に過ごしてもらわねばなりません。絶望は人格の崩壊をもたらし患者も家族も地獄の苦しみを味わうことになるわけで、一縷の望を残しておかなければなりません。希望のうちに終焉を迎えさせることが大切であります。

何事もそうでしょうが、医学はまだまだ途上の学問で、日進月歩を遂げています。明日には、新しい治療法が、あるいは新しい特効薬が世界の何処かで報告されるかも知れないのですから。脳外科医にとって幸なことには、患者の最終段階には意識障害の期間があり、

これは家族に死の受容を決定させることになります。

最近の私共の事例の中で突然の痙攣で発症した高校生が１年半の経過の中で大学受験の希望を持ち続け、父親は何とかそれを叶えてやりたいと言いつづけていた例がありました。しかし、病変部は優位半球の左であった為もあって、何時の間にか記憶を失い、漸次意識障害が出るに及んで、患者の死を迎える苦悩は少なかったのではないかと考えられるのです。変り行く患者の容態を黙々と看護していた母親の精神力の強さに頭が下がる思いでありました。

非常に不味い事例も最近経験しています。左足原発の肉腫の全身転移の11歳の少年の例で、頭部の腫脹の愁訴で精査入院になりましたが、患者と家族も何故か一種異様なムードの中にいて、全くとも言って良い程コミュニケーションしないのです。漸次揃って来る資料は全て悪性であることを知らせるものか、何時どのように告知するか苦慮していましたが、燕労災病院脳神経外科、神経内科との神経放射線の臨床検討会でＣＴ画像を見ていた燕労災病院の脳外科医が突然、患者の名前を言い、病歴を語ったのでした。

彼等も、また入院精査を勧めたらしいのですが、拒否され、資料について県立癌センターの友人と話しているうちに、それは治療途中で癌センターを逃げ出した患者であることが判明したと言うことでした。

後に父親と話し合ってみると、当初「たいしたことはないですよ」と言われた右足の腫瘤が、間もなく下腿後部のヒラメ筋部にも出現して、切除を受けた後間もなく100％助からないと言われ、充分なコミュニケーションのない段階であった為に、家族は思い悩み、多くの人達とも相談した結果、弥彦の阿弥陀様にお縋りして、その言うがままに右往左往していると言うことでした。

私共の所に入院したのは方向が良かったのかも知れませんが、診察した若い医者が一寸もらした、感染性のもので穿刺、洗滌で良くなる可能性もあると言う言葉に飛びついたものの様です。最初の不味い告知は家族に消し去ることの出来ない精神外傷を与え、後の医療が円滑に行われない状況をつくってしまったのです。

患者や家族に死の受容を安心立命の中に完成する事は医療の科学、技術面だけではない最も根本的な部にかかわっているわけです。中には医者風情にそこまで立ち入ってもらう必要はないと拒絶を示す患者もおりましょう。それは、医師が医の科学と技術の面にのみとどまっていて、誰からも受け入れられ、信頼を得ることの出来るような人格の涵養に欠けていたことを示唆するものでした。心しなければならないことです。

しかし、その事、即ち安心立命の中での死の受容は医師一人の手で遂行させ得るものではありません。初めに述べましたように医療従事者全員の真摯な努力に依るわけで、その為には職員一人一人の人格が大切にされ、専門職業人としてのプライドを持って仕事が行われる環境でなければなりません。

私共は何時、この様な場を持ち得るのでしょうか。現実は日暮れて道遠しの感があります。あるべき姿に向かって絶えざる努力が必要でありましょう。

昼食後の話としては一寸重くなったことをお詫びいたします。

（レコーダーの電池切れで、原稿を書くことになりましたが、記録に残すには好ましくない点もあったのかも知れませんし、また言葉不足で誤解を招く虞もありそうでしたので、これを幸と割愛したり、書き加えたりしたところもあることをおことわりいたします）。

キーワード　**ジオフロント構想**

大地の事をギリシャ語で「ジオ」という事から地下空間開発の事を「ジオフロント」あるいは「ジオトピア」などといわれています。

ジオフロント構想とは、ここ数年大都市の地価高騰、都市の超過密化などにより開発の目が地下空間に向けられて来たもの。50ｍ以上の地下は地上権が及ばないとする規制緩和が実施されたことも手伝ってこの構想に拍車をかける結果となった。

東京山手線の地下化計画などは地下70ｍ前後にもっていくなども含めて地下都市時代へ向けて政府も動き始めました。

ニューヨーク、ロンドン、パリあたりに較べて東京、大阪の地下利用はまだまだ遅れているとも言われており、21世紀に向かっての都市開発の目は地下空間開発利用の方向に向けられている様です。

次週例会	4月19日	クラブアッセンブリー
次々週例会	4月26日	親睦例会　湯田上温泉「若竹」ＰＭ６：30～

PolioPlus